

たちの田舎暮らしの志向は非常に高い。「田舎暮らしの本」でも読者は50歳代の夫婦が最も多く、そのことから田舎暮らしというのは50歳代が中心になるかと思われる。ただ、他の雑誌に比べると、「田舎暮らしの本」の読者層は広範にわたっていて、各世代の人がそれぞれの田舎暮らしを考えているということも言える。若い人は若い人なりの田舎暮らしがあるということで、年齢的には相当幅を持って見てほしい。

それから、大きな特徴が見られるのが男女の意識差である。田舎暮らしに関する調査において、田舎暮らしをしたいという人を性別で集計すると、往々にして女性は男性の半分以上という結果になる。

男性はサラリーマンが多いが、勤めを終えたら田舎に行きたくてしょうがないという人が数多くいる。今の地域社会には根を張っていないし、地縁もなく、友達もいないというように今の地域社会は全然関係ないので、退職したら釣りをしたり畑をしたりという田舎暮らしをすぐ志向する。

ところが女性は、子供の教育のことや、奥さん同士の付き合い、それに自分のコミュニティもあるということで、田舎に対して強いニーズがない。

ここで、男性が自分のロマンだけで奥さんを無理やり田舎に引っ張って行くとうまくいかないことがほとんどである。行く側も受け入れる側も男性だけを見て物事を考えていると田舎暮らしは失敗する。難しいことではあるが、女性をうまく引き入れることが大事である。

住宅については、今は中古で700万円から900万円くらいの物件が一番のボリュームゾーンになっている。その一方で、更地に新築する人もいる。田舎では地価が安いので、土地建物合計で2000万円くらいかけて家を建てる人が結構いる。また、都会では家を1軒建てるとなれば、普通の家でも4000万円から5000万円はさらにかかるし、3500万円ではちっぽけな分譲マンションしか買えないが、田舎で3500万円から4000万円くらいをかけて、ロケーションの良い広い敷地に立派な家を建てて住んでいる人もいる。そこは田舎暮らしの非常におもしろいところで、物件の価格は都会に比べると圧倒的に有利な条件になっている。

また、家にこだわりがあって、古民家を再生して住みたいという人も結構多いし、ログハウスがどうしてもよいという人もいて、家の形態については様々である。

#### (4) 田舎での仕事

非常に大きな問題なのは田舎でどのようにして食べていくのかということである。20万円の年金だけで暮らせるか暮らせないかという議論はあるが、年金を受給しているのであれば、田舎でつましく暮らせば、暮らせないことはないと思う。年金に加えて、何らかのアルバイトや若干の仕事ができればなおよい。

現役の人たちの場合は、田舎に住んでいる人でさえ仕事はそれほど豊富にあるわけではないので、収入を得ていくことは非常に難しい問題であり、逆にこの問題をクリアすることができればどの地域にも勝てるだけのポテンシャルが出てくると思う。

一般的に言うと、木工や陶芸やガラス工芸などをする人は、広くて音を立てても気にしなくてよい場所が必要だということで、地方に住むケースが多い。

食べ物関係では天然酵母のパン屋であるとか、ソバ屋や農家レストランなどをしている人がいる。

今日では食の安全に関して生産者も消費者も関心を持っていて、第一次産業に就きたい、安全な物を作る仕事をしてみたいという人が若い世代を中心に多い。ただ、プロの農家でも食べていくのがなかなか大変であるのに、新規就農したばかりの人ではそう簡単にいかないという問題がある。

「田舎暮らしの本」としては、旦那さんが第一次産業に就くのであれば、奥さんが例えば保健師などの仕事をするような形で、誰かしっかり稼いでいる人がいてほしいとか、一人でやるにしても、手に職を持っていて何かもう一つの仕事との兼業を考えることなどを勧めている。専業でというのはよほどのセンスと技術がないとできないので、あまり勧めていないがニーズは高い。

また、ある程度営業経験を持っていたり、手に職を持っている人だと、田舎に住んで近くの都市に勤めることもある。